

【実践報告】

大学入学予定者が抱える不安感の実態

——「大学生生活支援カード」導入後4年経過時の報告——

緒方 敦子* ・ 井手 沙織*
向 晃佑** ・ 小田 浩伸***

キーワード：障がい学生支援 早期支援 高等教育

要約：大阪大谷大学では、2019年度より入学予定者を対象に「大学生生活支援カード」を導入し、要支援学生への早期支援に取り組んでいる。本稿では、「大学生生活支援カード」の中でも、大学生活で不安に感じていることを問う項目の回答結果を報告し、大学入学予定者が抱える不安感の実態と障がい学生支援部署が担う役割について考察を加えた。対象は、2019年度から2022年度に本学に入学した学生2474名とした。4年間の推移から、大学入学を予定している学生は「成績・単位取得」や「友人関係」「進路」などに不安を抱きやすいことを明らかにした。また、コロナ前後の比較により、コロナ禍で不安を抱える入学予定者が増えていることも明らかとなった。これらの結果から、新生が入学前など早期に大学生活の見通しを獲得できるような機会が必要であることが示唆された。特に、コロナ禍においては、修学環境が大きく変化していることから、大学生活の準備期間を充実化させることが求められた。これらの全学的な支援において、学生の実態に合った支援の試みや提案を行うことも、障がい学生支援部署が担うことの出来る役割の一つであることが示唆された。

I. はじめに

我が国では、2014年に国連の障害者権利条約を批准し、2016年には「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」が施行されたことにより合理的配慮の提供に向けた支援体制の構築が広く進められることとなった。また、2021年6月には障害者差別解消法が改正され、「合理的配慮の不提供の禁止」は国・地方公共団体等に限らず、民間事業者においても法的義務が課されることが決まった。大学等では、私立大学が民間事業者に位置付けられており、法改正により「合理的配慮の不提供の禁止」が努力義務から法的義務化さ

*大阪大谷大学障がい学生支援室

**長崎国際大学

***大阪大谷大学教育学部

れた。本学においても 2017 年 4 月に障がい学生支援の専門部署として「障がい学生支援室」（以下、支援室）が設置された。

日本学生支援機構による 2021 年度の報告では、大学をはじめとした高等教育機関では、障がい学生の在籍率は 1.26% にのぼり、何らかの支援を要する学生が一定数存在することが窺える（日本学生支援機構，2022）。障害種別で見ていくと、「病弱・虚弱」に次いで「精神疾患」「発達障害」の順に多い傾向が認められる。「精神疾患」においては、在学期間中に発症する後発事例も含まれることから、大学生活への適応が難しい学生を早期に発見して支援していく事が非常に重要であると考えられる。先行研究では、学生の精神的健康度を把握するスクリーニングや低単位学生の対応などの報告も見られる（九州大学総合相談支援部門コーディネーター室，2020）。

「大学生生活支援カード」の取り組み

本学では、新入生に向けた取り組みとして、2019 年度の入学者から入学手続きの中で「大学生生活支援カード」というアンケートを実施している。このアンケートは、障がいや疾患のある学生における①大学における日常的な支援、②合理的配慮の検討、③緊急対応の把握、に用いる事を目的として実施しており（向・井手・小田，2020）、入学後の修学環境の調整や大学生生活全般における支援の提供に役立てている。

「大学生生活支援カード」の過去の研究では、アンケートの実施によって入学と同時に支援を可能とすること（向・井手・小田，2020）や、支援を必要とする学生の不安を低減させること（井手・向・小田，2021）を明らかにしている。また、教員はアンケートの回答を通じて事前に支援を必要とする学生の情報を得て、学生の対応に生かしている（向・井手・小田，2021）ことも報告しており、アンケートの実施は学生のみならず教員側にも効果的に働くことが窺える。

これまでの研究では、入学時点で障がいや疾患のある学生の支援における「大学生生活支援カード」の効果性について検討を進めてきた。しかし、先述したように、入学時点で障がいや疾患を抱えていない学生であっても、大学生活を送る中で障がいや疾患を抱える場合がある。なかでも、精神疾患は、大学生生活の適応状況が発症や病状の悪化に繋がることもある為、修学環境において学生がリスクを抱えやすい場面を特定して予防的対応を行う事も非常に重要であると考えられる。

以上を踏まえ、本稿では「大学生生活支援カード」の中でも、大学生活で不安に感じていることを問う項目の回答結果から、大学入学予定者が抱える不安感の実態について報告を行うこととする。また、報告においては、「大学生生活支援カード」を始めた 2019 年度から 2022 年度の 4 年間の入学者のデータを使用する。

加えて、この4年間は新型コロナウイルス感染拡大とそれに伴う活動自粛など、コロナ禍の影響は避けられないものと考えられる。本学においても、2020年は入学式と新入生向けのオリエンテーションを終えた直後に緊急事態宣言が発出され、6月に入るまでは学生の登学が禁止となった。その後、実技や実習などは対面での授業が再開されたが、その他の授業においては遠隔授業を基本とする授業方針が固められた。2021年度は対面授業を再開したものの、感染状況を踏まえて、前期は2回目から10回目までの9週間、後期は1回目から4回目までの4週間で遠隔授業を行った。

先行研究では、コロナ禍において新入生が時間割の組み立てや課題の取り組みに多く時間を要することに対して不安を抱きやすいことを明らかにしている（東北大学学生相談特別支援センター、2020）他、コロナ禍直後に入学した2020年度入学者は年数が経っても大学生活に充実感を得づらいことが報告されている（全国大学生生活協同組合連合会、2022）。

これらの状況を踏まえ、コロナ禍が大学入学予定者の不安感に与える影響についても検討を行うこととする。また、本稿の報告を通じて、コロナ禍を含めた障がい学生支援に必要な視点や障がい学生支援部署の担う役割について考察を加えたい。

II. 大学入学予定者が抱える不安感の実態調査

1) 大学生生活支援カード（資料1）

A. 質問紙の構成：

大阪府立高校で実施されている「学校生活支援カード」を参考に作成しており、質問項目は全7項目で構成されている。項目1から3は学生自身の強みや人との関わり方、大学生活での不安に関する質問項目に対して選択式で回答を求める形式となっている。項目4から7は、合理的配慮の希望に関する項目で構成されており、受診先の医師からの指示や大学生活で希望する配慮、支援室への相談希望について「はい／特にない」の2択で回答を求める項目と、任意で詳細内容を記述する欄を設けている。

B. 実施手続き：

2019年度入学者より入学手続き書類として提出を求めており、入試形態別に提出期間を定めて回収を行っている。回収時期は入学前年の10月から入学年の3月であり、入学予定者の半数以上が入学前年12月までに回答している。

回収された「大学生生活支援カード」は、支援室で複写1部を、入学予定先である学科事務で原本を保管している。

大学入学予定者が抱える不安感の実態

資料 1

大学生生活支援カード

学籍番号	
------	--

このカードは、安心して安全な大学生生活を送るために作成するものです。この調査で得られた個人の情報は、目的以外のことで利用することはなく、情報を知り得る教職員については、守秘義務を徹底いたします。

記入日：令和 年 月 日

受験番号：	ふりがな 氏 名：
学 部：	学科・専攻：

1～7の項目について、**学生本人**が回答してください。

- あなた自身が最も得意と思う力を、次の3つの中から選んで、□に✓を入れてください。

□ 相手の話をきちんと聞く力 □ 課題や提出物をやり遂げる力 □ 発言や発表、企画・立案する力
- 人との関わり方について教えてください。次の項目において、AとBのどちらが自分の考え方と近いか、あてはまる位置の数字に✓を入れてください。

A	Aに近い		Bに近い	B	
いろいろな人と友人になりたい	1	2	3	4	必要な人と関わりたい
人の意見を参考にして行動する	1	2	3	4	自分の考えに沿って行動する
困った時は、人に相談する	1	2	3	4	困ったときは、自分で解決する
- 大学生生活で、不安に感じていることがあれば、あてはまる項目に✓をいれてください。

□成績・単位取得 □進級 □卒業 □進路 □友人関係 □対人コミュニケーション □いじめ □遅刻
□欠席 □忘れ物 □課題提出 □生活リズム □その他（ ）

合理的配慮の希望について（保護者にご相談ください。）
 ※合理的配慮は、配慮希望の確認後、別途、申請・検討を経て、学生と大学側の合意のもとに実施することになります。

- 疾患や障がい等で、医師から指示を受けていることはありますか。 □はい □特にない
 ※差しつかえなければ、具体的に、医師からの指示の内容や希望する支援の内容について記入して下さい。
- 授業や課題など修学面で、大学に配慮を希望することはありますか。 □はい □特にない
 ※差しつかえなければ、具体的に、不安に感じていることや希望する支援の内容について記入して下さい。
- 大学生生活面で、大学に配慮を希望することがありますか。 □はい □特にない
 □トイレ □食事 □更衣 □移動 □その他（ ）
 ※差しつかえなければ、具体的に、不安に感じていることや希望する支援の内容について記入して下さい。
- 必要な配慮や支援のための相談を希望しますか。 □はい □特にない
 ※差しつかえなければ、具体的に、不安に感じていることや希望する相談の内容について記入して下さい。

C. 要支援学生の把握：

全7つの質問項目の内、項目4から7で「はい」と回答した学生は要把握学生と位置づけ、支援コーディネーターから学科へ情報共有を行った。入学後、要把握学生には所属学科のアドバイザー教員による個別面談を実施し、面談を通じて合理的配慮の検討が必要と判断された場合や、学生自ら支援室での相談を希望する場合は、支援室に接続してもらうこととした。

2) 大学入学予定者が抱える不安感の実態

本稿では、「大学生活支援カード」を開始した2019年度から2022年度の学部入学者2474名（2019年度：679名、2020年度：690名、2021年度：585名、2022年度：520名）を対象として、「大学生活支援カード」を構成する7つの質問項目の内、3つ目の大学生活の不安内容を選択する項目（以下、不安項目）の回答状況を報告する。

A. 不安項目の回答状況（表1）

各不安項目において回答者数と年度全体における回答者の割合を算出した。4年間の推移を見ると「成績・単位取得」が最も多く（1464名、59.18%）、次いで「進路」（864名、34.92%）「友人関係」（812名、32.82%）の順に多かった。

以上より、4年間ともに「成績・単位取得」や「友人関係」「進路」に回答した学生が多かった。

高校から大学への移行を考えた時に、新入生は大学に入学してから新たな友人関係の構築や、教育システムの変更、一人暮らしの開始など、様々な変化を経験していることが窺える。

表1 各不安項目の回答者数及び割合

	単位 成績 取得	進 級	卒 業	進 路	友 人 関 係	対 人 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	い じ め	遅 刻	欠 席	忘 れ 物	課 題 提 出	生 活 リ ズ ム	そ の 他
2019年度・ 679名	365 (53.76)	134 (19.73)	94 (13.84)	203 (29.90)	221 (32.55)	146 (21.50)	12 (1.77)	59 (8.69)	30 (4.42)	49 (7.22)	117 (17.23)	129 (19.00)	6 (0.88)
2020年度・ 690名	377 (54.64)	130 (18.84)	83 (12.03)	241 (34.93)	204 (29.57)	175 (25.36)	7 (1.01)	33 (4.78)	18 (2.61)	42 (6.09)	84 (12.17)	143 (20.72)	2 (0.29)
2021年度・ 585名	375 (64.10)	133 (22.74)	92 (15.73)	228 (38.97)	197 (33.68)	157 (26.84)	19 (3.25)	55 (9.40)	25 (4.27)	57 (9.74)	118 (20.17)	119 (20.34)	8 (1.37)
2022年度・ 520名	347 (66.73)	127 (24.42)	90 (17.31)	192 (36.92)	190 (36.54)	167 (32.12)	18 (3.46)	43 (8.27)	29 (5.58)	54 (10.38)	120 (23.08)	121 (23.27)	9 (1.73)
合計 2474名	1464 (59.18)	524 (21.18)	359 (14.51)	864 (34.92)	812 (32.82)	645 (26.07)	56 (2.26)	190 (7.68)	102 (4.12)	202 (8.16)	439 (17.74)	512 (20.70)	25 (1.01)

数値は学生数・（ ）内は年度全体に占める割合

この移行期間で生じる変化は、学生に与える心理的影響も大きい。

今回、「成績・単位取得」との関連が考えられる「進級」「卒業」「遅刻」「欠席」「忘れ物」「課題提出」の6項目で同様の結果が得られなかった。このことは、大学入学予定者の多くが、高校と大学の間で生じる教育システムの違いを具体的に想像出来ていない可能性が考えられる。

原田ら（2018）では、大学1回生が学修面の不安を抱きやすいことを指摘している。本稿においても、「成績・単位取得」に回答した学生が半数以上であったことから、学生の多くは入学前の段階から学業への不安を抱えていることを示唆した。文部科学省は「初年次教育」という新入生向けのカリキュラムを導入している大学が増えていることを報告しているが（文部科学省、2020）、そもそも高校と大学では教育システムが大きく異なる為、授業を受ける前段階として高校と大学の違いを把握する機会が必要と考える。

他大学では、大学入学を控えた障がい学生を対象として、大学生活における支援について学ぶ機会を提供しているという報告もある（京都大学高等教育アクセシビリティプラットフォーム事務局、2021）。しかし、多くの学生が学業に対する不安を抱えていることを踏まえると、障がい学生に限らず不安を抱える学生向けの支援が必要と考える。

本学の場合、新入生の半数以上が12月までに入学手続きを終える。つまり、入学決定から入学に至るまでの3か月以上は空白の期間となる。この期間に大学生活の見通しを具体的にすることで、入学に伴う不安を軽減する事が期待される。

本稿では、「友人関係」や「進路」を選択した学生も多かった。ベネッセ教育総合研究所（2012）では、大学生が友人と知り合う場として、「1年生の時の授業」（62.3%）、「部・サークル」（45.1%）、「入学後のオリエンテーション」（38.8%）の順で多いことを報告していることから、友人関係の構築には学生同士が交流できる場が必要であることが窺える。一方で、近年は学内での交流の機会のみならず、大学入学前からSNSを通じて同じ大学の繋がりを求める傾向も見られる。入学前から友達との交流を求めている学生が一定数いることから、入学前などの早期の段階で学生が安心して他学生と交流できるような機会を提供していく視点も重要であると考えられる。

「進路」の不安に関しては、学生の背景要因による影響を考えなければならない。本学は、4学部6学科で構成されているが、その内2学部2学科は教職や保育職、薬剤師等の資格取得を目指している。その為、入学先の学科の特色なども、今後の「進路」への不安感に影響することが考えられる。また、同じ学科を志望していたとしても、入学時の入試形態は学生によって様々である。どの時期に大学受験を経験したか等、入学決定に至るまでの過程も「進路」の不安感に影響があると考えられる。今後、学生の属性が与える影響について、更なる検討が必要である。

B. コロナ前後の割合の比較（図1）

コロナ禍の影響を検討する為、2019・2020年度入学者と2021・2022年度入学者で群分けを行った。その上で、2019・2020年度入学者を「コロナ前入学者」、2021・2022年度入学者を「コロナ後入学者」と命名した。

なお、本稿において、2020年度入学者を「コロナ前入学者」と位置付けた理由については、入学手続きの時期が入学前年の12月から入学年の3月までであることと、入学予定者の半数以上が新型コロナウイルス感染症拡大前の12月までに回答を行っていたことを挙げたい。

各不安項目において回答した学生の割合を算出した。その上で2群間の比較を行ったところ、全体としてコロナ後入学者はコロナ前入学者に比べて不安項目に回答した学生の割合が増加した。特に、「成績・単位取得」（コロナ前入学者：54.20%；コロナ後入学者：65.34%）及び「対人コミュニケーション」（コロナ前入学者：23.45%；コロナ後入学者：29.32%）「課題提出」（コロナ前入学者：14.68%；コロナ後入学者：21.54%）において割合の増加が著しかった。

コロナ後入学者は、例年よりも不安項目に回答した学生が増えていることが示唆された。このことから、コロナ禍の影響で入学予定者が抱える不安感の実態が変化したと考えられる。特に、「成績・単位取得」をはじめとして、「対人コミュニケーション」や「課題提出」が増加した背景には、コロナ禍の高校生活で休講や遠隔授業を経験した学生が一定数含まれることが挙げられる。

コロナ禍において、大学では高校以上に学習環境が大きく変化し、LMS（Learning Management System：学習管理システム）での授業管理が主流となった。これらの体制整備が進んだことで、感染状況にとらわれず学習環境にアクセスすることが可能となった。一方で、学内の

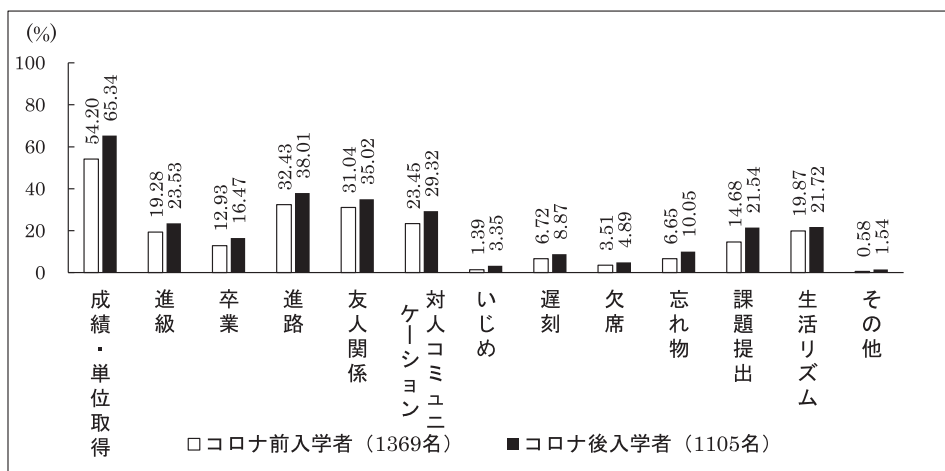


図1 各不安項目の回答者の割合

伝達手段が増えたことにより、情報が一元化されず情報取得の負担も増大した。また、遠隔授業では、遠隔ツールの使用技術や課題提出に伴う自己管理スキルも必要となり、新入生は大学入学と同時に様々な対応を求められることとなった。実際に、本学では授業以外にメールやLMS、遠隔会議システムなどを用いて伝達事項を共有している。支援室を訪れる学生の中には、情報を上手く整理できず、課題の締め切りや教室変更などの把握が難しい学生もいる。先行研究では、コロナ禍において発達障がい学生が課題管理の困難を抱きやすいことも指摘しており（黒山・菊池・本吉，2022）、情報取得の苦手な学生にとっては混乱しやすい環境にあることが窺える。

多くの場合、大学1回生は入学と同時に時間割の組み方や履修登録の方法などを一気に把握しなければならない。しかし、コロナ禍の動向を踏まえると、入学時に得る情報はコロナ禍前に比べてはるかに増えたことが推測される。学修の在り方が多様化したコロナ禍においては、大学生生活の準備期間を充実化することがこれまで以上に重要になると考える。当支援室は、障がいや疾患の有無に関わらず、情報取得の苦手さがあり、履修方法やスケジュール管理等の相談を希望して来談する学生もいる。学生の得意・不得意を理解して修学支援を実施出来るのは、障がい学生支援部署の強みとも言える。特に、コロナ禍においては、学生の個別な支援に留まらず、学生の実態に即した全学的な支援の試みや提案なども、障がい学生支援部署が担うことの出来る役割の一つと考える。

また、全国大学生生活協同組合連合会（2022）では、コロナ禍直後に入学した学生（2020年度4月入学者）において、入学後1年経過した後も大学生生活の充実度が他学年と比べて低いことを報告している。このことは、入学時期の環境がその後の大学生生活の適応にも影響を及ぼすことを意味しており、改めて大学生生活の導入を丁寧に取り組む必要があることを確認した。また、在学期間中の適応という点で、入学時期以降の学生の状態についても注視する必要があると考える。なお、本学では、支援室に繋がった学生の支援において、「大学生生活支援カード」の記載情報を参照することで、学生の状態把握に繋げる場合もある。このような点で、「大学生生活支援カード」は入学期の支援のみならず、在学中の支援においても活用することが出来ると思われる。

Ⅲ. 結語

本稿では、大学入学予定者が抱える不安感の実態について調査を行った。調査を通じて、入学を予定している学生は「成績・単位取得」や「友人関係」「進路」などに不安を抱きやすいことを明らかにした。また、コロナ禍で修学環境が変化した事により、不安を抱える入学予定者が増えたことも明らかとなった。この結果から、入学時や在学期間中に必要な支援が見えて

きた。特に、本稿では、本学において新入生の多くが入学前年の12月までに入学手続きを終えていることに触れ、入学決定から入学に至るまでの期間の過ごし方が大学生活の適応を考える上で重要であることを述べた。今後、入学前の時点で大学の教育システムを知る機会や、入学予定者同士の交流を促すような場の設定についても検討したい。これらの全学的な支援において、学生の実態に合った支援の試みや提案を行うことも、障がい学生支援部署が担うことの出来る役割の一つであると考ええる。なお、本稿では、入学先の学科の特色や入試形態などが与える影響については明らかにしていない。学生の属性が入学時期の不安感に与える影響についても検討が求められる。

文献

- 原田新・池谷航介・松井めぐみ・望月直人 (2018). 「大1 コンフュージョン」の実際 (第1報) - 高校と大学のギャップに戸惑う新入生の実態調査 -, 岡山大学教師開発センター紀要, **8**, 97-107.
- ベネッセ教育総合研究所 (2012). 第2回大学生の学習・生活実態調査報告書 [2012年] https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/2012/hon/pdf/data_12.pdf (2023年2月2日)
- 井手沙織・向晃佑・小田浩伸 (2021). 発達障がい学生支援における「大学生生活支援カード」を用いた早期支援の効果性 - 支援学生へのインタビュー調査から見た一考察 -, 大阪大谷大学教育学部特別支援教育実践研究センター紀要, **5**, 27-35.
- 黒山竜太・菊池哲平・本吉大介 (2022). コロナ禍初期における発達障害学生への学生支援機関の対応, 熊本大学教育実践研究, **39**, 57-63.
- 京都大学高等教育アクセシビリティプラットフォーム (HEAP) 事務局 (2021). 障害のある大学入学予定者対象「プレキャンパスプログラム in 京都・大阪」 <https://hacc.osaka-u.ac.jp/ja/r2precampus/> (2023年1月20日)
- 九州大学総合支援部門コーディネート室 (2020). 2019年度総合相談支援部門コーディネート室活動報告, 九州大学学生相談紀要・報告書, **7**, 119-130
- 文部科学省 (2020). 平成30年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要) https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt_daigakuc03-000010276_1.pdf (2023年1月20日)
- 向晃佑・井手沙織・小田浩伸 (2020). 私立大学における新入生を対象とした要支援学生への早期介入の取り組み - 「大学生生活支援カード」の導入による初年度の実践報告 -, 大阪大谷大学教育学部特別支援教育実践研究センター紀要, **4**, 39-47.
- 向晃佑・井手沙織・小田浩伸 (2021). 大学教員から見た要支援学生の早期介入における効果と課題 - 「大学生生活支援カード」導入初年度の教員アンケート調査結果から -, 大阪大谷大学教育学部特別支援教育実践研究センター紀要, **5**, 15-26.
- 日本学生支援機構 (2022). 令和3年度 (2021年度) 大学, 短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書 https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/_icsFiles/afidfieldfile/2022/08/17/2021_houkoku_2.pdf (2023年1月20日)
- 東北大学学生相談特別支援センター (2020). 教職員向けリーフレット <http://www.ccds.ihe.tohoku.ac.jp/wp-content/uploads/2020/12/a7e4bd31d2c6a998f1a25932fd2960d1.pdf> (2023年1月20日)
- 全国大学生生活協同組合連合会 (2022). 第57回学生生活実態調査 概要報告 <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (2023年1月31日)